

血染めの鍵

第一章

イエー・リンの店は、うらぶれた雰囲気のリード街ストリートと、劇場の町として栄えるきらびやかな大通りとのあいだにある。リード街は、立ち並ぶ店舗や作業場、クリニックの入り口に看板を掲げ、さびれかけてはいるが手堅く商売を続ける帽子店、仕立屋、歯科医院が無数に林立する地区から、しだいにベネット街ストリートのひどく雑然とした町並みへと変わっていく。いや、この界隈を表現する場合、正確かつ適切に言うなら「雑然とした」では言葉が足りない。ベネット街は、昼間は大声が飛び交い、夜はさらにけたたましい喧噪で満ちあふれる地区なのだ。道路は、子沢山の家が多いこの辺りに暮らす子供らの遊び場であり、上半身裸の男たちが、あらゆるもめ事を力で解決する「リング」でもある。そしてその傍らで、女たちが金切り声で声援を送ったり、声高に意見を言い合ったりしているのだ。た。

イエー・リンのレストランは、堅気の店が並ぶリード街の端で、一風変わった中華料理チャイニーズディッシュを食べさせる店として創業された。やがて創業者であるこの陰気な顔つきの東洋人は、一軒、また一軒と隣接する建物を手に入れて店舗を広げ、徐々にきらびやかな通りへ近づいていった。

そして瞬く間に目抜き通りに到達すると、豪華だが落ち着いた店構えに一変させ、フランス人シェフと、洗練された人気給仕長、シニョール・マチドウィーノを筆頭にイタリア人のウエイターらを

雇い入れた。目を惹く金色の屋根瓦にちなみ、店名は〈ゴールデン・ルーフ〉とした。瓦の下の外壁には紫檀の羽目板があしらわれ、提灯型のランプがいくつか下がっている。二階と三階に個室のダイニングルームがあり、金色のエレベーターで上がっていく造りになっていた。個室のドアは板ガラス製で、透けて見える薄手のカーテンが掛かっている。少々気取りすぎではないかとイエー・リンは思ったが、出資者がどうしても譲ろうとしなかったのだ。

なかには板ガラスのドアがない部屋もあるのだが、どれも目立たない箇所には振り分けられていた。そのうちの一つに、通常の食事客が絶対に通されることのない部屋があつた。どんな重鎮が来ようと、その規則が曲げられることはなかつた。それは、廊下の突き当りに位置する六号室だつた。そばにスタッフ専用口があり、そこを抜けると曲がりくねつた迷路のような通路がリード街に面した古い建物へと続いている。そちら側は、イエー・リンが苦勞した創業当時の状態のまま残されていた。古いほうの店に中華料理を食べに来る客には、イエー・リンの生まれ故郷である漢口出身の、足音をたてずに静かに歩くウェイターが給仕した。

昔からの店の常連は、イエー・リンが急速に富を得たことを嘆き、よい身なりをした新たな客を鼻で笑っていた。一方、身なりのよい客たちのほうは、貧しい近隣住民の存在など意に介さずに平然と高価な食事に舌鼓を打ち、決まつた時間になると、イエー・リンが金に糸目をつけず雇つた〈オールド・オリジナル・サウスカロライナ・シンコペイテッド・バンド〉の演奏に合わせてダンスを楽しむのだった。

イエー・リンが高級なフロアに足を踏み入れるのは年に一度、春節の日だけだつた。旧正月を祝うこの日は、白いベストと手袋を身に着け、きっちり襟元を締めた白シャツに白の燕尾服という風変わ

りないでたちで店に現れた。

それ以外の日は、うらぶれた通りときらびやかな通りの中間地点にある、壁じゆうに雑誌の表紙を切り抜いた色鮮やかな写真が貼られた狭苦しい休憩室に座ってくつろいだ。この部屋ではいつも黒いシルクのローブを身にまとい、柄の長いパイプをくゆらせていた。日曜を除き、每晚七時半になると、イエー・リンは外の通りに面した戸口へ足を向けた。一つのレストランをつなぐ建物についているドアのノブに手を置いて待つのだ。娘が先にやってくることもあれば、老人が先に来ることもあった。いずれの場合も二人はたいがい無言で戸口を抜け、六号室へ上がっていく。彼らが到着すると、イエー・リンは休憩室に戻ってパイプ煙草を吸いながら、漢口はんこうにいる息子に美しい文で綴った長い手紙を書いた。彼の息子は大変な勉強家で、詩人としても学者としても成功していた。学士院会員に相当する（フォレスト・オブ・ペンシルズ）の一員にも選ばれている。

イエー・リンは、ストーフォードに建設する新しい建物の案件に没頭していて、その屋敷の名誉ある主人として、大使に就任した息子が納まるのを夢見ることがあった——大使の選出に教養の高さが大きくものを言う中国では、決してあり得ないことではない。

二人の客が出ていくところをイエー・リンが目にするとはなかった。二人とも勝手に出口へ向かい、いつも八時すぎにはいなくなっていた。ウエイターも六号室には出入りせず、食事はちよつとしたビュッフェ形式であらかじめ用意されていた。部屋と廊下のあいだに引かれたカーテンで人目から遮られ、二人を知るのはイエー・リンだけだった。

月初めの月曜日には六号室へ行き、一人でいる客にひざまずいて中国流に叩頭こうとうの礼（目上の人物に対する中国の礼の形式）を行った。この日は必ず老人だけが部屋にいるのだった。イエー・リンは大きな漆塗りの金庫を手

し、分厚いノートを小脇に抱えて六号室の老人の前に出ると、食事の並んだテーブルに金庫とノートを置き、うやうやしくひれ伏した。

「座りたまえ」破擦音が交じる南部地方特有の訛りで、ジェシー・トラスミアが言った。イエー・リンはゆったりしたガウンの袖に礼儀正しく両手を隠し、老人の言葉に従った。「それで？」

「今週は売り上げが落ちました」と言いながらも、イエー・リンの口から謝罪の言葉はなかった。「好天続きで、客の多くが街を出ておりまして」

袖から手を出して金庫を開け、紙幣の束を四つ取り出した。そのうちの三束を右に、一束を左に分ける。老人は手近にあった三束を手に取り、小さく唸った。

「昨夜、警察が来て建物の中を見せるよう言われました」平然とした口調でイエー・リンが言った。「警察は地下室を見たがりましたね。中国人は地下に必ずアヘンの吸引所を持っていると思っております」

「ふんー」と言いながら、トラスミアは紙幣の束を親指でパラパラとめくった。「こいつはたいしたもんだな、イエー・リン」

トラスミアは、足元の黒い鞆に金を入れた。イエー・リンは軽く首を横に振り、暗に同意を示した。「ファイサンで、わしの下で働いていた男を覚えてるか」

「あの飲んだくれですか」

老人はその呼び名に頷いた。

「近々、やつがこの国に来る」と、楊枝を噛みながら言った。トラスミアは六十代くらいのも、いかつい顔をした男だった。くたびれた黒のフロックコートは痩せた体にサイズが合っておらず、流行遅れ

の襟元は擦り切れ、細い首に巻いた紐タイは使い古されて元々の固さを失い、両端ともつれてだらしなく垂れ下がっている。目は鮮やかなブルーで、ごつごつした顔は、硬く鱗状うろこじょうになった皮膚がトカゲを思わせた。

「そう、やつがイギリスに来るのだ。この町へのアクセス方法を見つけ次第、現れるだろう。ウエリントン・ブラウンくらい旅慣れた男には造作もないことだ！ イェー・リン、この男は厄介だぞ。夜のテラスですつと眠っていてくれればありがたいんだが」

イェー・リンが再び首を横に振った。

「彼を消すわけにはいきません——この国では」と、イェー・リンは言った。「ここでは、私は潔白の身で知られているのです——」

「お前は頭がどうかしているのか」トラスミアが、とげとげしい声で言った。「わしが人殺しをした、殺人を依頼したりすると思うか。命の値段が安い黒竜江にいたときでさえ、わしの金を盗きんんだ男を痛めつけることしかなかったのだぞ。しかし、この大酒飲みの口だけはどうしても封じなければならん。やつはアヘン常習者だ。お前の店に吸引所がないのは知っている。そんなものにわしが我慢ならんからだが、お前ならそういう場所に心当たりがあるのでは……」

「いくらでも知っています」と、イェー・リンはにこやかに言った。

イェー・リンは戸口まで主人を送り、ドアが閉まるとすかさず休憩室に戻って、発育不全の中国人の男に呼びかけた。

「あの方のあとをつけて、無事を見届けろ」

その口調は、まるで今夜初めてトラスミアの警護を命じたかのように聞こえるが、実を言うところの

六年間、通りに面したドアが閉まる音をイエー・リンの鋭敏な聴覚が察知すると同時に、足をひきずって歩く中国人の男は、毎晩、一言一句同じ命令を耳にしてきたのだった。日曜を除き、一日も欠かさずに……。

イエー・リン自身は、決してジェシー・トラスミアを追うことはしなかった。彼には、毎晩十一時に始まり、たいてい早朝までかかる別の任務があつたのである。

〔著者〕

エドガー・ウォーレス

本名リチャード・ホレイション・エドガー・ウォーレス。1875年、英国ロンドン生まれ。新聞の売り子やトロール船の乗組員として働きながら学問を修め、1894年に英国陸軍歩兵隊へ入隊。除隊後は記者として活躍したが名誉毀損による損害賠償問題を起こして失職する。1905年に発表した処女作「正義の四人」がベストセラーとなり、以後は専業作家として膨大な数の小説を書いた。32年、ハリウッド滞在中に肺炎と糖尿病を併発して急逝。

〔訳者〕

友田葉子（ともだ・ようこ）

津田塾大学英文学科卒業。非常勤講師として英語教育に携わりながら、2001年、『指先にふれた罪』（DHC）で出版翻訳家としてデビュー。その後も多彩な分野の翻訳を手がけ、『極北×13+1』（柏艸舎）、『死者はふたたび』（論創社）、『ショーペンハウアー 大切な教え』（イースト・プレス）など、多数の訳書・共訳書がある。

ち　　ぞ　　かぎ
血染めの鍵

——論創海外ミステリ 202

2018年1月20日　初版第1刷印刷

2018年1月30日　初版第1刷発行

著　者　エドガー・ウォーレス

訳　者　友田葉子

装　丁　奥定泰之

発行人　森下紀夫

発行所　論　創　社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1686-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします